

吉田宗恂の運氣論について

島野達雄

空想を逞しうすると、彼がああいふ調子の文章を書くことができたのは、白石がキリシタンの宣教師シドッティを審問した経験のせいではないか。

丸谷才一「文章論的憲法論」

1.はじめに

吉田宗恂（永禄元年(1558)－慶長 15 年(1610)）は、父・宗桂の医業を継ぎ、若くして豊臣秀次につかえ、長じては徳川家康につかえ、隔年に江戸に伺候、いわゆる大御所政治の時代には駿府に陪侍し、慶長 15 年 4 月 17 日に 53 歳で死亡した。

医業のかたわら、経学を好み、古今医案 33 卷、歴代名医伝略 2 卷のほか、薬性纂類 18 卷、増補医経小学 12 卷、本草序例抄 7 卷、素問講義 6 卷、難経注疏 4 卷、医方大成論抄 1 卷を著した。

このうち現存するのは、古今医案に寄せた藤原惺窩の序文、歴代名医伝略、本草序例抄、医方大成論抄の 4 点で、本文と序跋などがある刊本として残っているのは、歴代名医伝略・本草序例抄・医方大成論抄の 3 点に限られている。

以上の経歴は、幕府が吉田・角倉家から提出された資料にもとづいて編纂した、寛永諸家系図伝および寛政重修諸家譜に記されている。

寛政重修諸家譜・卷 427 の「吉田」条には「厳秀、近江国吉田庄を領せしより、代々家号とす。のち徳春、山城国嵯峨の角倉に住せしとき氏族尤（もつとも）多し。故に自他相呼て角倉といふ。これにより庶孫或は角倉をもつて家号とす」と、「角倉」の由来が記されている。

宗恂に関する、2 つの家譜の内容はよく似ており、著書を紹介したあと、寛永諸家系図伝では「もつはら運氣をくハしくす。故に運氣諸論の図及び枢要の図、漏刻の図等を作る」、寛政重修諸家譜では「また運氣にくはしくして、運氣諸論の図をよび枢要の図漏刻の図等をつくる」と記されている。

ここでいう「運氣諸論の図」とは、北宋の劉温舒が著した『素問入式運氣論奥』に掲載されている 30 個の図表を指すのであろう。

「枢要の図」は同書の「五運六気枢要之図」と推定できる。

「漏刻の図」は同書の「日刻之図」を指すのであろうが、東京都立中央図書館に宗恂の著書とみられる『漏刻算』の写本があり、付随する「図」があったのかもしれない。

『素問入式運氣論奥』の「論日刻第八」は、子・酉・午それぞれの「正の中」、戌・未・辰それぞれの「正四刻」の 2 種類の時刻をあげている。『漏刻算』にも「酉正四刻」、「子正刻」などの時刻があらわれており、どちらも同じ時刻制を採用している可能性がある。

なお現在、国文学研究資料館は、「吉田宗恂撰」としながら、宗恂が生れる前の天文 9 年（1540）の序文をもつ刊本『運氣論一言集』（巻 1 のみ）、および天文 11 年（1542）筆写の同名の写本（全巻）を所蔵している。旧蔵者の下浦康邦氏は「吉田・角倉家においては実に

天文9年(1540年)の時点で既に数学・天文学への志向があったことを証明している」(『吉田・角倉家の研究』近畿和算ゼミナール報告集第3輯 1999)としているが、これらの著者が吉田宗恂でないことは言うまでもない。

劉温舒の『素問入式運氣論奥』は、わが国の「運氣論」の出発点となった。

宗恂より後の、饗庭(あえば)東庵や岡本一抱が『素問入式運氣論奥』の詳しい解説を試みている。ただし、饗庭東庵や岡本一抱らの暦(四分暦)に関する所説は、劉温舒を批判し、劉温舒より後の朱子学派に依拠している。(島野達雄「江戸時代の医者が持っていた暦の知識(要約)」2009 ネットの「和算序林」に掲載中)

本稿では、饗庭東庵や岡本一抱らに先行して、吉田宗恂が、いち早く慶長年間に、著書の『本草序例抄』第3巻で朱子学派の蔡沈の『書集伝』(書経の注釈書)を紹介していることを明らかにしたい。

2. 劉温舒の運氣論

劉温舒『素問入式運氣論奥』は、古代中国の医学書『黄帝内経(だいけい)素問(そもん)』、略して『素問』(唐・王氷(啓玄子)の注が付いている)にもとづき、「運氣論」の奥義(?)を述べた書。多くの図表を使い、「五運(ごうん)六氣(りっき)」の概念によって、天地の生成変化の本質(?)を述べている。

劉温舒は、五運は木火土金水の五行の運行、六氣は寒暑燥湿風火の六つの気、としている。内容は、日月五星の動き、歳(年)・月・日・時の長さ(周期)から、方角、音楽、納音(なっちん)占い、さらには人体のネットワークである脈、病気およびその治療におよぶ。極めて観念的思弁的に記述されており、論理的整合性や実証性からは、ほど遠い。

暦に関しては、1年(1太陽年)の日数を365日1/4とする、古代の四分暦(古四分暦ともいう)にもとづいている。

1年を6氣に分け、「每氣各主六十日八十七刻半。総之乃三百六十五日二十五刻(每氣おのおの60日87刻半を主(つかさ)どる。これを総じてすなわち365日25刻)」(論交六氣時日第七)との記述があり、班固の漢書律曆志と同様の1日=100刻制を取り入れている。

とくに「論四時氣候第六」には、『素問』六節藏象論の「日行一度、月行十三度而有奇焉、故大小月三百六十五日而成歳、積氣餘而盈閏矣」、および班固撰『白虎通』の引用がある。

①経曰、日常於昼夜行天之一度、則一日也。共三百六十五日四分之一而天度乃成一歳。

経(『素問』のこと)にいわく、日(太陽)常に昼夜に天の一度を行く。すなわち1日なり。共に(あわせて)365日4分の1にして、天度すなわち1歳となる。

②天自西而東転。其日月五星循天、從東而西転。故白虎通曰、天左旋、日月五星右行。日月五星在天為陰故右行。猶臣對君也。

天は西よりして東転す。日月五星は天を循(めぐ)り、東よりして西転す。故に、

白虎通曰く、天は左旋し、日月五星は右行す。日月五星は天に在りて陰をなす故に右行す。なお臣（臣下）の君（君主）に対するがごとし。

③月則昼夜行天之十三度。有奇者、謂復行一度之中、作十九分、分之得七。大率月行疾速、終以二十七日、月行一周天。是将十三度及十九分之七数、總之則二十九日、計行天三百八十七度有奇。

月（天体としての月）はすなわち昼夜に行くこと天の13度。有奇は復（また）行くこと1度のうち、19分を作り、これを分かち、7を得る。大率（おおむね）月行は疾速（はやい）、終（ついに、最終的に）27日をもって月行は天を一周す。是まさに13度および19分の7の数。これを総じれば（合計すれば）すなわち29日、計るに天に行くこと387度有奇。

①は、『素問』の1年=365日 $\frac{1}{4}$ の解説。劉温舒はこの「論四時氣候第六」で「三百六十五日四分度之一」という「日」と「度」が混在した表現も使っており、日と度は同じものと考えていたようだ。「天度乃成一歳」は365度 $\frac{1}{4}$ =1年と考えていた、と解釈できる。周髀算經以来の「周天の度数365度 $\frac{1}{4}$ 」（全天の角度、いわゆる中国度）を劉温舒は知らなかったのだろう。

②は、のちに朱子によって批判される、『白虎通』の「天左旋・日月右行」の解説。この部分、岡本一抱の『素問入式運氣論奥診解』には『白虎通』の説と朱子学派の説の、2つの図があり、朱子学派の説を「正説」としている。

『白虎通』の説を時計でたとえると、天は文字盤、日は短針、月は長針になる。時計の中心から見れば、短針と長針は右回り（時計回り）であり、文字盤は相対的に左回り（反時計回り）に見える。朱子の門人・蔡沈が著した『書集伝』の、「朱子の曰く、

[1]天道は左旋す。日月また只左旋す。

[2]但し天の行くこと健やかなり。

[3]一日一夜して周りて

[4]常に一度を差過す。

[5]日月は天と違いて退く。日は是、一日退くこと一度。月は退くこと十三度有奇

を同様に時計にたとえると、[1]は、時計全体が左回りで1日に1度だけ回転していることを言っていると思う。[2]は易・乾卦の「天行健なり。君子自彊して息（や）まず」からの引用であろう。

[3]の「一日一夜して周る」は南極・北極を回転軸とする天の日周運動のこと。『白虎通』の「天左旋」を日周運動と解釈することもできる。[4]は[1]と同じく時計全体が1日1度左回り（反時計回り）すること。[5]は時計の短針と長針のことを言っている、と思う。

③は、月行の13度 $\frac{7}{19}$ の解説をおこなったうえで、

$$365\frac{1}{4} \div 13\frac{7}{19} = 27.322\dots, \quad 365\frac{1}{4} \div \left(13\frac{7}{19} - 1\right) = 29.536\dots, \quad 29 \times 13\frac{7}{19} = 387.614\dots$$

の3つの計算結果を示しているのであろうが、月行が天を一周する期間（27日）以外は、途中の計算はもちろんのこと、何を求めたのかも書いていない。

これらを現代の言葉で言えば、順に、恒星月の日数、朔望月の日数、朔望月1か月間に月が進む度数（単位は中国度）、にあたる。それぞれ小数点以下は切り捨てている。

3. 吉田宗恂の運氣論(1)

一方、吉田宗恂の中国度や四分曆の説明は、難解で観念的な劉温舒の『素問入式運氣論奥』に比べて、極めて明快になっている。

宗恂が著した『本草序例抄』巻3の「三品合」条は、次のように中国度と四分曆を説明している。なお、本稿の原文は、国会図書館白井文庫の『本草序例抄』に依拠している。

- ①度と云（いう）は日也。天にては度と云、曆にては日と云。一度と云は一日と云（いう）心なり。一歳は三百六十五度四分度之一也。朔虚分の小月、六日をひかずして云は（いえば）、十二ケ月は三百六十日也。
- ②又、氣盈（きえい）と云が五日四分度の一ぞ。即五ケの没日（もつにち）也。四分度の一は、はした（端数）ぢやほどに、略していはぬ也。
- ③一月は三十日也。四月は三四・百二十日也。百二十種は四ケ月の数ぞ。下薬に五種多（おおき）ことは氣盈の五日を加へたぞ。下の文に陶が注を云て、閏の盈数と云たぞ。又、君（君主）は少く、佐使（さし、補佐役と使者役）は多に象（かたどる）ぞ。

①の前段は、解説の必要はないであろう。

後段は「朔虚」の計算。蔡沈『書集伝』にもとづいて計算を示すと、1年（1太陽年）を365日 $\frac{1}{4}$ とする四分曆では1年を12か月と仮定して、12朔望月の日数は、日月のスピードの差 $13\frac{7}{19}$ マイナス1日（つまり12日 $\frac{7}{19}$ 。月の対太陽速度）を用いて、

$$365\frac{1}{4} \div \left(13\frac{7}{19} - 1\right) \times 12 = 29\frac{499}{940} \times 12 = 354\frac{348}{940}$$

をえる。これを「一歳月行の数」とよぶ。

「朔虚」は、1年を360日（=30日 \times 12）と仮定したとき、360日から「一歳月行の数」を引いた、

$$360 - 354\frac{348}{940} = 5\frac{592}{940} = 5.629\dots$$

をいう。宗恂はこれを「六日」と表現している。（宣明曆でもほぼ同じ5.64…になる。）

②の「氣盈」は、1年の日数から360日を引いたもの。すなわち

$$365\frac{1}{4} - 360 = 5\frac{1}{4}$$

となり、宗恂はこの値を正しく知っていたことがわかる。

「没日（もつにち）」は、四分曆ではなく宣明曆の曆注の一つで、1年の日数と360日との間で生じる余分の差（通余という）を累積し、1日になる日付をいう。宣明曆では約69.2日ごとに現れる万事に大凶の日付のこと。宗恂は、ここでは、四分曆の1年の日数から360日を引いた結果の整数部分つまり5日を「5ケの没日」と呼んでいる。1年を365日 $\frac{1}{4}$ とすると、

とする宣明暦でも、整数部分は5日になる。

宣明暦には「滅日（めつにち）」という暦注もある，30日と1朔望月の日数との間で生じる余分，つまり，ひと月分の朔虚を累積し，1日になる日付をいう．約62.9日周期で現れる．この日も万事に大凶．

没日と滅日の計算法は，今村知商の弟子・安藤有益の『長慶宣明暦算法』に書いてある．

吉田光由『古暦便覧』の森氏胤序には「滅没」の用語が登場する．

ふつう没日，滅日は，わが国独自の暦注とされるが，納音（なっちん）のように中国に出自があるかもしれない．清代の方書『欽定協紀弁方書』32巻（大阪府立中之島図書館蔵）は未調査．

③の「百二十種」以下は，神農が作ったという『神農本草経』（単に『本草』または『本草経』ともいう）の文章を説明している．上中下の薬は『神農本草経』の上中下巻に対応する，というもの．以下の原文は，国会図書館蔵『本草叙例』（村上平楽寺版）に依拠した．

(1)上薬一百二十種，為君主養命，以応天無毒，多服久服不傷人．欲軽身益氣不老延年者，本上経．

上薬は一百二十種．君（君主）として養命を主（つかさ）どる．天に应じるをもって無毒，多服・久服するとも人を傷つけず，軽身・益氣・不老・延年を欲す者は，上経（神農本草経の上巻）に本（もと）づく．

(2)中薬一百二十種．為臣主養性．以応人無毒有毒，斟酌其宜．欲過病補虚羸者，本中経．

中薬は一百二十種．臣（臣下）として養性を主どる．人に应じるをもって無毒・有毒あり，その宜（よろしき）を斟酌すべし．過病・補虚羸（きょえい）を欲すは，中経（神農本草経の中巻）に本づく．

(3)下薬一百二十五種，為佐使主治病，以応地多毒，不可久服．欲除寒熱邪氣破積聚愈疾者，本下経．

下薬は一百二十五種．佐使（補佐役と使者役）として治病を主どる．地に应ずるをもって多毒，久服すべからず．寒熱・邪氣を除き積聚（せきじゅ）を破り，疾を愈（いや）さんと欲すは，下経（神農本草経の下巻）に本づく．

(4)三品合三百六十五種，法三百六十五度．一度応一日以成一歳．倍其数合七百三十名也．

三品合わせ三百六十五種．三百六十五度を法に，一度は一日に应じ，もって一歳を成す．その数を倍し，合わせて七百三十名なり．

(5)薬有君臣佐使，以相宣撰．合和宜用一君二臣三佐五使，又可一君三臣九佐使也．

薬に君臣佐使あり，相宣をもって撰す．合和，宜しく一君二臣三佐五使に用ゆべし．又，一君三臣九佐使も可なり．

と『神農本草経』にあり，③の「下薬は五種多」とは，(1)(2)の上薬と中薬は各120種類で，(3)の下薬は5種多い125種であることを言っている．

「陶が注」は『神農本草経』に加えられている南北朝・梁の陶弘景（陶隱居）の注を指す．

「君臣佐使」は、薬剤に主従補佐役の働きがあることをいう。

ともあれ、宗恂は、①②③で④の「三品合」の解説を懇切丁寧におこなっていると言えるだろう。

林羅山の自筆写本『本草序例註』も、同じく『神農本草経』の(1)(2)(3)(4)に注釈として「三卷者上経中経下経也」とのみ記している。

4. 吉田宗恂の運氣論(2)

さらに、宗恂は同じ『本草序例抄』巻3「兼以」条で次のように述べる。

- ① 閏之盈数とは歳に十二月あり。一月三十日也。一日之を天之一度と謂（いう）。古の曆を以て云へば、一度を九百四十分にわくるぞ。三百六十日は一歳の日数の常数なり。天の行（いく）ること日よりも一歳の間に疾（はや）き分五百五十三五分（注：五日二百三十五分の誤り）と云もの也。これを氣盈と云也。又一歳に月の日より退くこと五日と五百九十二分と云者也、これを朔虚と云ふ也。故に月を以て数（かぞう）れば一年三百五十四日餘あり。
- ② 其天の氣盈と月の朔虚とを合て閏月と云者が生ずるを故に一歳率、則十日に九百四十分日之八百二十七。
三歳一閏なる則（ときん）ば三十二日九百四十分日之六百單一。
五歳再閏なる則ば五十四日九百四十分日之三百七十五。
十有九歳七閏なる則ば氣朔分齊、是を一章と為也。
- ③ 故に三年而閏を置（ざる）則は春之一月、夏に入。而時漸定（まら）ず矣。子之一月、丑に入、而歳漸成らず矣。之を積（つむ）こと已に久して三び（みたび）閏を失うに至（いたる）則は、春皆夏に入、而時全く定まらず矣。十二たび閏を失、子皆丑に入。歳全く成らず矣。其の名実（なまじ）に乖戻し、寒暑反易して農桑庶務皆失す。其の時の故に必ず此の餘日を以、閏月を置。其の閏に然後、四時差（たがえ）ず、而歳功成得。此信に百官を治、而衆皆廣し也。
- ④ 宣明曆は少しこれとかはるぞ。素問抄に詳（つまびらか）に見へたり。
- ⑤ 其の閏を置く天の餘り五日の氣盈の方を取、五種の薬に合せたぞ。
- ⑥ 又、尚書堯典に云く、期三百有六旬有六日、閏月を以て四時に定、歳を成すとあり。三百六十五日の餘分があるほどに六日と云（いう）たもきこへたぞ。
- ⑦ 今重刊本草を考るに、本経白字の薬三百六十六種あり不審ぞ。

①②③は蔡沈の『書集伝』堯典とほぼ同じ。ここに「蔡沈の書集伝曰く」などとは書いていないが、『本草序例抄』巻4に「蔡氏が尚書（しょうしょ）の注の義なり」、「しかれば陶（陶弘景）は蔡氏が義とはちがうたぞ」との記述があり、宗恂が『書集伝』を読んでいたことは確実である。なお、書経は、古くは単に書といい、漢には尚書、宋には書経といった。

①は本稿でこれまで説明したことだが、再度、計算式を示しておこう。

$$\text{気盈} \quad 365\frac{1}{4} - 360 = 5\frac{1}{4} = 5\frac{235}{940} \quad \text{1年の日数} - \text{1歳の常数} \quad (\text{分母は940に統一})$$

$$\text{朔虚} \quad 360 - 354\frac{348}{940} = 5\frac{592}{940} \quad \text{1歳の常数} - \text{1歳月行の数} \quad (\text{つまり12朔望月})$$

②も同様に計算式を示す。「一歳率」を『書集伝』は「一歳の閏率」と呼ぶ。

$$\text{一歳率} \quad \left(365\frac{1}{4} - 360\right) + \left(360 - 354\frac{348}{940}\right) = 5\frac{235}{940} + 5\frac{592}{940} = 10\frac{827}{940} \quad \text{気盈} + \text{朔虚}$$

$$\text{三歳一閏} \quad 10\frac{827}{940} \times 3 = 32\frac{601}{940} \quad \text{1歳率} (= \text{1歳の閏率}) \times 3$$

$$\text{五歳再閏} \quad 10\frac{827}{940} \times 5 = 54\frac{375}{940} \quad \text{1歳率} (= \text{1歳の閏率}) \times 5$$

$$\text{十有九歳七閏} \quad 10\frac{827}{940} \times 19 = 215\frac{673}{940} = 29\frac{499}{940} \times 7 \quad \text{19歳の率} = 7 \text{朔望月}$$

今村知商は以上の計算を、1度を940分とし、940を分母とする分数の分子だけを計算し、最後に、上記とは若干異なるが、19歳の率=7朔望月を証明している。(島野達雄「校注・今村知商『日月会合算法』第87回近畿和算ゼミナール 2007)

③は『書集伝』とそっくりそのまま同じ。

④は、当時使っていた宣明暦と、ここで説明した四分暦とが、1年(1太陽年)の日数などが異なることを言っている。

「素問抄」は、元の滑寿が著した『素問』の注釈書。素問鈔とも書き、読素問抄(鈔)ともいう。『読素問鈔』下之二・運氣は、『素問』六節蔵象論の唐・王氷(啓玄子)の注釈をそのまま転載している。この王氷注は、班固『漢書』律曆志を引用し、天体としての月の不等速運動を紹介している。宗恂が「王氷注」と言わず「素問抄」としている理由はわからない。

月はケプラーの法則にしたがい、楕円軌道(白道)上を不等速で運動する。このことを中国では、漢書律曆志の時代に知っていた。

⑤は、気盈の5日と、さきの上薬、中薬は各120種あり、下薬は125種で5種多いことが対応している、と言っている。

⑥は、『素問』六節蔵象論・王氷注および劉温舒の『素問入式運氣論奥』論四時氣候第六の最後に、この『書経』堯典の「期三百有六旬有六日、閏月を以て四時に定、歳を成す」の文言が紹介されているので、それに倣(なら)ったのであろう。

⑦は、明の成化4年(1468)の序をもつ『重刊本草』は、本経白字つまり『神農本草経』の陰刻した部分の $120+120+125=365$ 種ではなく、366種と書いてあって、不審である、と述べている。各種の本草書の「序例」はおおむね、原典である『神農本草経』の文を黒地に

白抜きの文字で印刷している。

序例とは、重刊証類本草叙、重刊本草序、重修証類本草序、政和新修経史証類備用本草序など、各種本草書の序をあつめたもの。北宋の『重修政和経史証類備用本草』には、こうした序をまとめた序例が巻1にある。わが国では、この『重修政和経史証類備用本草』から序例部分を抜き出した、『本草序例』という書名の刊本が何種類も出版された。

大阪府立中之島図書館には、国会図書館所蔵の『本草叙例』（寛永16年（1642）村上平樂寺版）とは異なる4種の『本草序例』がある。1本は元和6年（1620）、1本は年紀なし河内屋八兵衛・河内屋喜兵衛版、2本は異種の無刊記本で、4本すべて国会図書館のものと異なる。

5.まとめ

ここに紹介した『本草序例抄』巻3の「三品合」条と「兼以」条からは、吉田宗恂が医学はもちろん暦学にも深い知識を持っていたことがわかる。

『本草序例抄』全7巻には、この他にも、漢文を呉音・漢音のどちらで読むか（呉音漢音之事）、易经・繫辞伝の「開物成務」の意味、中国各地の都市の位置、わが国の医学の略史など、広い範囲にわたる知識が披露されている。引用書目は、医書はもちろん、史記や漢書などの正史、太平御覧や文献通考、玉海などの類書をはじめ、地理書の大明一統志、字書、神仙伝、仏典、道蔵（道家の書）など多数におよぶ。

宗恂の「運氣論」は、劉温舒のそれを遥かに超え、言うなれば「自然科学」の領域に達していた。『和漢三才図会』の寺島良安が饗庭東庵の系譜に連なる運氣論者とみなされていたように、江戸時代、「運氣論」は「自然科学」の代名詞であった。

しかも宗恂は、自分で調べ、自分で考え、自分の言葉で述べている。わずか4字の「閏之盈数」に対して、これだけの分量の注釈を「自分の言葉」で言えることのできた人物は、当代に吉田宗恂しかいなかったであろう。

寛永諸家系図伝と寛政重修諸家譜には、宗恂が徳川家康につかえ、父・宗桂が明から持ち帰った光明朱（上質の朱）を献上したほか、諸医がわからなかった南蛮渡来の瑪瑙（めのう）を言い当て、また珊瑚の名称・産地などを言い当て、恩賞を受けた逸話が記されている。

この2つの家譜には、慶長の役で捕虜となった姜沆（きょうこう、カンハン）が『歴代名医伝略』に序文を寄せ、宗恂を絶賛したことも記されている。

宗恂にとって「外国」は、身近なところだった。

おそらくは、イエズス会宣教師とくに家康と毎年のように会っているジョアン・ロドリゲスとは、何度も語り合ったに違いない。『書集伝』の「三歳一閏・五歳再閏・十有九歳七閏」（ロドリゲスの表現は「三年ごとに一つの閏年を置き、…さらに五年ごとに二つの閏年を置き、…十九年に七つの置閏を行う」岩波・大航海時代叢書『日本教会史』第2巻第8章）など、二人に共通する知識は数多くある。

ただ、250年を越える禁制のもとで、その記録はすべて消し去られている。 ●

【年表】(ABCDは『歴代名医伝略』の諸版)

- ・1577 (天正5年) ジョアン・ロドリゲス来日
- ・1580 (天正8年) ロドリゲス, イエズス会入会
- ・1582 (天正10年) 曲直瀬道三一溪, 重刊証類本草の序を講義 (*1)
- ・1584 (天正12年) 曲直瀬道三一溪キリシタンに改宗と宣教師フロイスが報告
- ・1597 (慶長2年) 慶長の役で姜沆捕虜となる A 無刊記活字本・宗恂自序
- ・1598 (慶長3年) Aの姜沆序, 慶長3年12月(1599)
- ・1600 (慶長5年) 関が原の戦い
- ・1602 (慶長7年) カルロ・スピノラ来日 マテオ・リッチ『坤輿万国全図』
- ・1603 (慶長8年) 『本草序例抄』成立と白井光太郎が推定 (*2)
- ・1604 (慶長9年) スピノラ入洛 ロドリゲス『日本語文典』(ポルトガル語) 刊行開始
- ・1605 (慶長10年) 不干斎ハビアン『妙貞問答』
- ・1606 (慶長11年) 南蛮寺で羅山とハビアンが論争 ロドリゲス, 天文学を家康に講ず
スピノラ「数学を知っていれば尊敬されるでしょう…」書簡を発信
- ・1607 (慶長12年) 羅山, 江戸に下り幕府に禄仕 家康, 駿府に移居し, 宗恂陪侍する
- ・1610 (慶長15年) ロドリゲス, マカオに追放される
- ・1611 (慶長16年) 劉温舒『素問入式運氣論奥』活字本, 宗恂門人の梅寿 (*3), 刊行
- ・1612 (慶長17年) 南蛮寺, 幕府によって破壊される
- ・1617 (元和3年) B 元和3年活字本刊行
- ・1618 (元和4年) スピノラ, 長崎で捕縛される
- ・1620 (元和6年) ロドリゲス『日本語小文典』(ポルトガル語) 刊行
- ・1622 (元和8年) スピノラ殉教 百川治兵衛『諸勘分物』 毛利重能『割算書』
- ・1623 (元和9年) 吉田宗恂『本草序例抄』活字本刊行
- ・1626 (寛永3年) C 寛永3年活字本(梅寿重刊) 刊行 林羅山, 書集伝の訓点を完了
- ・1627 (寛永4年) 吉田光由『塵劫記』初版
- ・1630 (寛永7年) マテオ・リッチの著作等禁書
- ・1631 (寛永8年) 「或師」の跋文をもつ『塵劫記』刊行
この頃ロドリゲス, マカオで『日本教会史』の執筆開始
- ・1632 (寛永9年) D 寛永9年整版本(田原仁左衛門版) 刊行
- ・1634 (寛永11年) ジョアン・ロドリゲス, マカオで没(?)
- ・1639 (寛永16年) 「或師」の序文をもつ今村知商『堅亥録』刊行
- ・1642 (寛永19年) 今村知商, 『日月会合算法』を執筆(書集伝に算注)
- ・1653 (承応2年) 嶋田貞継『九数算法』刊行(書集伝に算注)

*1 『本草序例抄』巻1に, 明の嘉靖2年(1523)刊行の『重刊証類本草』の陳鳳梧の序文について, 「此序, 日本天正十年, 一溪老師始て之を講. 刊本古文也」とある. 刊本古文とは, この序が隷書体であることをいう.(隷書でない刊本もある)

- *2 *1と同じく『本草序例抄』巻1に、嘉靖2年(1523)について「日本人皇百代後柏原院の大永三年癸未也。日本慶長八年癸卯までは八十一年なるぞ」とあり、所蔵者の白井光太郎博士が本書の成立を慶長8年(1603)と推定した。国会図書館白井文庫の『本草序例抄』表紙裏には、*1と*2に関する白井博士の書き込んだ付箋がある。この本には、吉田家所蔵を示す「吉田称意館」の蔵印がある。
- *3 上田市立図書館花月文庫の『歴代名医伝略』(D寛永9年(1632)田原仁左衛門版)上巻・内題の下には、「法眼意安恂撰」と並んで「門人梅寿・宗和刊行」とある。「門人」と「刊行」のあいだに「梅寿」「宗和」が割注で記載されている。

【参考文献】〔D〕はデジタル・データの閲覧)

- ・丸谷才一「文章論的憲法論」諸君 1979-11
- ・『寛永諸家系図伝』第15巻 続群書類従完成会 1980
- ・『寛政重修諸家譜』第8巻 続群書類従完成会 1964
- ・劉温舒『素問入式運氣論奥』寛永16年 梅寿重刊 国会図書館〔D〕
- ・下浦康邦『吉田・角倉家の研究』近畿和算ゼミナール報告集 第3輯 1999
- ・『運氣論一言集』巻1刊本／全巻写本 国文学研究資料館(理科大下浦文庫)蔵〔D〕
- ・饗庭東庵『医学授幼鈔』京都大学図書館富士川文庫蔵
- ・岡本一抱『素問入式運氣論奥諺解』早稲田大学〔D〕
- ・吉田宗恂『本草序例抄』国会図書館白井文庫〔D〕
- ・『重広補注黄帝内経素問』呉勉学校 万暦29年 国会図書館〔D〕
- ・班固『白虎通』百部叢書集成 芸文印書館 1968
- ・蔡沈『書集伝』嘉定2年序 出雲寺万次郎版 嘉永4年 大阪府立中之島図書館
- ・『書経大全』吉文字屋庄右衛門版 大阪府立中之島図書館
- ・安藤有益『長慶宣命曆算法』早稲田大学〔D〕
- ・吉田光由『古曆便覧』内閣文庫(国立公文書館)
- ・『本草叙例』村上平楽寺版 寛永16年 国会図書館〔D〕
- ・滑寿『読素問鈔』国立博物館〔D〕
- ・『漢書補注』上海古籍出版社 2008
- ・『重刊経史証類大本本草』籍山書院 万暦28年 関西学院大学
- ・ロドリゲス『日本教会史』岩波書店 大航海時代叢書 1970
- ・島野達雄「江戸時代の医者が持っていた暦の知識(要約)」2009 HP 和算序林
- ・島野達雄「校注・今村知商『日月会合算法』」第87回近畿和算ゼミナール 2007

この論考は武田科振興財団の2012年度杏雨書屋研究奨励の支援を受けた成果物の一つである。